ジャピーのお母さんと「神風」号

「赤い翼：パリ―東京」実行委員会 監事、元朝日新聞社 航空部長　鈴木 明治

1920―30年代の世界は、長距離飛行の時代を迎えていました。アンドレ・ジャピーがパリ―東京懸賞飛行に挑戦したころ、日本では朝日新聞社が、「神風」号と名付けた国産機で東京―ロンドンを飛行する計画を進めていました。早くから航空の未来に注目してきた同社は、さまざまな航空事業・イベントを手がけてきた実績があり、三菱重工業が開発した純国産機による訪欧飛行計画には、フランスなど航空先進国に追いつきたいという悲願が込められていました。

ジャピーの母、国際電話で息子の無事を聞いて感涙

当時、航空ニュースは大きな関心事でした。ジャピーの挑戦も紙面で大きく取り上げられ、東京朝日新聞では1936月4月からの1年間で、計66本の関係記事が掲載されています。ジャピー機遭難では号外を発行、翌日にはジャピーの母親宅に国際電話をかけています。記者がジャピーの無事を伝えると、母親は「私はこれ以上何も望むことはありません。記録だの懸賞金だのはどうでも構いません」「地元の人にお世話になったこと、私は生涯忘れないでしょう」と語ったと伝えています。

ジャピーは九大病院を退院した1937年3月に上京して朝日新聞社を訪問、「神風」号の飯沼正明、塚越賢爾飛行士と会い、二人の挑戦にエールをおくりました。夜には築地の料亭、新喜楽で盛大な歓迎会が催されました。ジャピーはパリ―東京飛行で自分が使った航空地図を朝日新聞社に進呈しましたが、残念ながら現物は社内に残っていません。

「神風」号飛行士をパリの自邸に招待、「三鳥人水いらず」の宴

37年4月6日東京・立川飛行場を出発した「神風」号は、10日未明ロンドン・クロイドン空港に到着し、94時間17分56秒の世界記録を達成しました。パリ上空では18機の仏陸軍機が出迎え、ル・ブルジェ空港の一角にはフランス航空省主催の歓迎会場が設けられました。ジャピーの母親も駆けつけ、両飛行士に祝意と感謝の気持ちを伝えました。

「神風」号はロンドンからの帰路にパリを再訪、両飛行士は凱旋門近くにあるジャピーの母親宅に招かれました。帰国したジャピーも加わり、「三鳥人水いらず」の晩さん会と報じられました（**図1**、**図2**）。飯沼飛行士は後に「ジャピーのお母さんは実に質素で親しみやすく、日本の小母さんにあった気がした」と回想しています。

「神風」号の快挙から3か月後の37年7月、盧溝橋事件が起きます。欧州では39年9月、ヒトラーがポーランドに侵攻、戦火と混乱の中で、ジャピーの挑戦や両飛行士らとの出会いはいつしか忘れられたのです。軍に徴用された飯沼飛行士は太平洋戦争開戦の直後のプノンペンで事故死、塚越飛行士は軍の密命により長距離飛行機A26でドイツに向かう途中、消息を絶ちました。赤い翼プロジェクトが、数々の飛行記録に挑戦した彼らへのオマージュとなれば望外の喜びです。

図1　帰国した息子を出迎えるジャピーの母親（左）
（1937年4月17日、ル・ブルジェ飛行場で）

図2　パリのジャピー邸で催された両飛行士の歓迎晩さん会。
左から、ジャピーの母親、塚越飛行士、ジャピー、
飯沼飛行士（1937年4月20日）